

【牧野教授 講演内容サマリー】

この2年間ほど、このような集いのたびに『コロナで』という枕詞を付けなければいけない生活を送っているわけだが、色々な形で繋がることできている。本日もウェビナーと言う形で繋がれているが、新しい繋がり方を考え乍ら新しい社会の在り方をか考えていきたい。東大でも昨年3月の卒業式も、4月の入学式も無くなり、今年も同様だが、完全オンラインで授業を行っている。今、4年生の卒論指導を行っているが、今の4年生はコロナのせいで未だ一度も本郷のキャンパスに来たことが無い学生もかなりいるような事態となっており、完全オンラインでの指導となっている。更には就活もオンラインとなっており、来年4月に入社してもどうなることやらと思っている。そのような中で幾つか新しい多様な動きが出てきているので、ご紹介しながら、皆様への期待もお話ししたい。

P1.

*今日のテーマは「子ども・若者たちに希望を！」でサブタイトルとして「人生100年時代のシニアへ」とさせてもらった。

「人生100年社会デザイン研究所」を昨年立上げ代表理事もしている。

P2.

*大きな方向性としては、今はなかなか希望を見出しにくい社会になってしまっているのではないかと思う。

そのような中で、子ども達には希望を持ってもらいたいとおもうし、そのためには私達、先に生きてきた者たちがこの社会をちゃんと

次の世代に繋げていかなければならない。ここに「恩送り」という言葉が書かれているが、英語では『Pay it forward』だと思う。

あるいは純粋贈与ともいうが、先輩たちは後輩に何か見返りを求めているわけではなく、後輩がまた次の世代に恩を送り続ければ良い。

その恩をどう送っていくのか問われているのではないかと思う。

お互いに贈り合うことが良いのではと思う。

P3. Sense of Wonder

*その中でキーワードになるのが、この3つだと思う。

ひとつが「Sense of Wonder」、これは半世紀以上前のアメリカの生物学者レイチェル・カーソンが、著書『沈黙の春』で記した言葉だ。公害で人間が環境を破壊してしまい、鳥が居なくなって、さえずりの聴こ

[ここに入力]

えない静かな春になってしまったという文章だが、その中で彼女がいったのが、子どもは好奇心や“びっくりする力”、即ち不思議さを感じる感性を持っている。しかし、大人になるとそれを忘れてしまって自分のことしか考えなくなってしまう。本来、自分自身も自然の一部なはずなのに、気づけば自然を破壊する側になってしまう。自分だけの利益を求めようになってしまう。そこで彼女がいったのが「子ども達の Sense of Wonder」。これを大事にしていくにはどうしたら良いのか、ということだ。しかも、この Sense of Wonder を子どもが発揮するためには、子ども達に寄り添う大人がいないとダメだといっている。「大丈夫だよ」と言葉をかけて、子供たちが「自分は此処に居てもいいんだ」と思えるような関係を作っていくことだ。

子ども達は元々、Sense of Wonder の力を持って生まれてきているのに、大人たちがそれを潰してしまっているのではないか、と彼女は警告している。

P4～6. 「親ガチャ」ハズレタ

* 最近、子どもや若者の間ではやっている言葉だが、親ガチャを回したら自分が望んでいない親が出てきてしまった。そんな親の元に生まれた自分は「しょうがない」と諦めてしまう。トレンドを見てみると「親ガチャ」の前には「毒親」という言葉が流行っていた。



更には「アダルトチルドレン」という言葉があった。どれもが自分の生き辛い境遇の責任の取りようのない状況を、親のせいにしてしまう傾向がある。ただ「親ガチャ」という言葉は少し新しい傾向を持っている。「毒親」は毒を持っているかいないか、二分法になっている。あんな毒を持った親のもとに生まれてしまったから、自分は仕方がないんだと親を責める言い方だ。

P7,8. 「毒親ブーム」消費

* 自分（牧野）の研究室の学生が「毒親ブーム」の研究をした。子どもの自立を阻む親に最後は「なぜ自分を産んだんだ」と恨むようになる。しかし自分が自立するにつれ、「あんな親でもしょうがないか」と考えるようになっていく傾向がある。

また、アダルトチルドレンと言う言葉はアルコール中毒者と結婚した女性の元に生まれた女子のことを言っていたが、アルコール中毒者を支えることを自分の役割と考えてしまい（共依存）、それを見て育った子どもが母親の行動を真似るようになり、結婚する際にアルコール中毒患者と結婚するケースが多く、それを表すものとして、アダルトチルドレンという言葉が使われた。それが一般化して、生きづらい自分を慰めるのに、自分はアダルトチルドレンだから、という表現が人口に膾炙した。

P9～11. 自分の境遇は自己責任

* ところが「親ガチャ」は自分が引いた物だし、そのランク分けもあるが、問題は、自分がガチャを回してあの親を引いてしまった、ということだ。つまり、あんな親を引いた自分が悪いんだという受け止め方になってしまい、出口が無くなってしまう。

[ここに入力]

さらに、逆に東大に入ってくるような偏差値 75 クラスの子たちは自分が努力したから合格したんだ、と自分だけの力だとしか考えが及ばず、親や周りのサポート、そういう努力ができる環境を作ってもらったことが見えていない。そのため不合格者に対して、「努力が足りない、努力しようしない駄目な人間だ」と考えってしまう傾向がある。アメリカでもそれが起きていて、努力したエリートの側とそうでない側という見方による分断が起きている。学力や家庭環境の違いだけのはずなのに、『人格的に高い／低い』という見方になってしまってきた。

アメリカでは低く見られた方は強く反発するが、日本では『やっぱり自分は駄目な人間なんだ』と捉えてしまう傾向がある。

P12～17. 若者自殺者数の増加

* コロナ禍の影響もあってか 2020 年に若者の自殺が急に増えている。90 年代後半、リストラが始まった頃には中高年の男性の自殺が急激に増えた。その後リーマンショックも経て落ち着いてきたが昨年、急にまた増えた。増えたのは女性で、多くが非正規雇用であったりという面もあるが、増えたうちのかなりの程度は小中高の子ども達だった。

自殺というのは、そもそも非常に大きなエネルギーが必要な行為で、従来は「生きることの疎外要因が大きくなる」と自殺するリスクが高まるといわれた。しかし、今は、それよりも「生きることの促進要因」が縮こまってしまい、死にたいではなく「生きていたくない」と感じて自殺を考えている傾向が増えていると言われている。

* そういう状況に対して、子どもたちの『肯定感』を高めようという動きがある。『もっと褒めましょう』というはなしがそれ。ところが今の子供や若者は「褒められる」ことが ZERO、デフォルトなので肯定感が高まらないし、寧ろ褒められ続けられていないと「へこむ」。

そして「褒められるように」先回りして行動しているので、そこで褒められなかったり叱られたりすると肯定感が下がってしまう。

実際、自分のゼミ生でも、男子にその傾向が強いが、突然、来なくなるので周りに訊くと、「牧野先生が僕のことを嫌いになった」という。

理由を聞くと「褒めてくれなくなったから」という事例が起きている。彼らは子どもの頃から褒められ続けており、「褒められる」＝「高く評価されている」と考えている。従って「褒められない」＝「低く評価された」と人格的否定評価をされた、価値のない人間と評価されたと受け止めてしまうようだ。

私達は「認めるから褒める」のだが、彼らは『高く評価されたから褒められた』と認識している。

P18～21 転換点の社会

* ということは、褒める褒めないの前の関係づくりが大切だということになる。

1～7 の課題に加えて、コロナ禍で今までは通勤した先にあった仕事が家庭の中に入り込んできているし、気候変動や自然災害も増えているが、これらを私たちは全て日常生活の中で引き受けなくてはいけなくなってきた。

更には各省庁の政策が日常生活レベルのコミュニティにまで降りてきている。それは、国の枠組みが動

[ここに入力]

揺れてきていることを示しているのではないかと思われる。高齢化で独居老人が増えることもあり、従来の家単位のコミュニティの考え方が通用しなくなってきた。また、個人をベースにした地域コミュニティづくりが始まっている。これから認知症の人が増えることもあり、今から手を打たないと間に合わないということで、厚労省なども『地域共生社会づくり』と言い出している。また最近では農水省が「農業地域づくり事業体」を始めたいといっている。これまでは農業を経済の側面からしか見てこなかったが、これからは地域づくり・後継者養成といった切り口から考え直す必要があるのだという。更に文科省はコミュニティ・スクールとか地域学校協働活動を盛んに打ち出してきており、これには私も関わってきている。地域が子ども達に体験活動・探究活動を提供できるように変えていこうというものだ。

また全国社会福祉協議会も「福祉教育から社会教育へ転換を」と言いだしている。先程申しあげたように、これから認知症の方がどんどん増えていくので、今までのように問題が起きたら人やお金を付けて解決していこうという取り組みでは、今から手を打っていかないと遅くなるということで、『地域共生社会づくり』と言い始めた。先手を打って社会そのものの在り方を変えていかなければいけないと言い出している。更に安倍政権末期の 2017 年に作られた「人生 100 年時代構想会議」が出している答申では、『全世代型の社会保障に切り替えたい』と言っている。そして抱き合わせで「学び直し」や「リカレント教育」を推進するということが言われている。

簡単に言えば、年金や健康保険の負担がとて重くなってきたので、できれば、正直なところ止めたいと思っているのだと思う。

だが、突然止めるわけにはいかないの、高齢者の年齢を 75 歳からにしようという話も出ている。65 歳からは準高齢者という呼び方にして「準」時代は年金を貰えない、ということにもなりそう。それらも含めて、ベーシックインカムは保証するから、足りない分は自分で何とかしなさい、ということにしたいということが透けて見えている。若い世代の年金負担が増えてきていて、十数年後には一人が一人を支えるという時代がやってくる。そういう観点で「足りない部分は自分の力で補いなさい」ということになってくると、何度も就職を繰り返すとかマルチステージな人生を歩んでくださいということになる。ということは、その場その場で学び直しをして「リ・スキリング」、技術を身に付け乍ら就職していく、という生き方に変えられませんかと言われ始めているということだ。今回の岸田政権の『新しい資本主義実現会議』の議論でも、リ・スキリングにより技術を身に付け乍ら就職を繰り返してもらわないと、保証が難しいということになっているようだ。その意味では、これらの議論は『学び』を基本にしないと成立しない。『地域共生社会づくり』も単に学び直すだけでなく、お互いが良い関係を作りながら、社会問題が起こらないようなコミュニティを作っていく、というようなことも含めて『学んでいく』ということを考えなくてはいけない社会になってきた。

P23～28. 焦点化される地域コミュニティと教育改革

そういった中で今『教育改革』もコミュニティが焦点化されている。

お孫さんをお持ちの方は関心を持っているかもしれないが、昨年 4 月から始まった新しい指導要領では、プログラミングとか外国語とかがいろいろ言われたが、実は『社会に開かれた教育課程』と中教審で言い始めている。人生 100 年という時代になったのに、学校教育が関われるのは精々その初期の 15 年間である。大学を入れても 20 年程度である。今までは、そこで学ぶ知識を使い回しをすれば良かったかもしれない

[ここに入力]

いが、これからはそういう時代ではないということだ。そうなる学校で教育課程を完結することは不可能だということになると、今から6年前に言い始めた。それを受けて慌ててその年の12月に【コミュニティスクール】を前面に打ち出した答申を中教審が作り、12月21日に3つの方針が纏めて出された。こんなことは文部省の歴史始まって以来だと言われている。

* アクティブラーニング（教員資質向上答申）：先生の教え方を変える、教員養成のあり方も変える。

どう変えるのかと言うと、主体的で対話的な深い学びに変える。子供たちは学校で知識を覚えるということだけでなく

100年間学び続けるための基本的な力・スキルを身に付けるようにする、というもの。探求できる子どもにするために

先生も知識を教えるのではなく、子どもと一緒に探求できる先生に代わってほしいというのがその心。

一方的に話せばよい授業ではなく、一人一人の生徒に寄り添い、子どもたちの Sende of Wonder に寄り添い、新しい

発見があれば一緒に喜んで、もっと探求できるようにしていく。子供たちも学んだこと見つけたことを教え合いながら対話的

な関係にしていく必要がある。

そうやってどんどん新しい価値を見つけていくような子供たちを育成してください、というのがこの答申である。

これに基づいて教員養成も変えるので既に教員養成課程も変わっている。

* チーム学校（チーム学校答申）：先生が多忙過ぎて子供たちに向き合う時間が無いという問題への対応

探求できる先生になるには、子供たちに向き合える時間を持たなければいけない。先生の手に残るようなことはそれぞれの

プロに任せましょうというのがこの答申。

例えば、カウンセラーや福祉の専門家スクールソーシャルワーカーの配置が始まっている。また、部活の指導員なども

可能であれば地域の方にやってもらいたいということになっている。そうやって先生方の負担を減らし

その分、子ども達と向き合う時間を増やしてくださいということ。

* 地域学校協働活動・本部（地域学校協働答申）

これまでは地域との協働と言うと、地域の方に学校に来てもらって学校の中で完結させるというやり方だったが、

それではもう間に合わないので、『逆にしましょう』という話。地域が学校の中に入るのではなく、『一緒に』と考え

子どもを真ん中に置きましょう、という考え方。地域が子ども達を学校から引き出し、子どもたちが学んだことを

[ここに入力]

地域で実践して深く探求したり、大人たちに揉まれながら、探求した結果を、皆で発表し合い共鳴しあえるような

環境を整備していかなければ、という答申です。

ですから此処に「地域学校協働本部」を作れないかという提案が入っている。そして『地域学校協働活動推進員』を

おけないかという提案。それが社会教育士という専門職になる。

更に、今までは STEM(Science,Technology,Engineering,Mathematics)、実用的な学問が大事だと

言われてきたが、STEAM(STEM + Art・Liberal Arts)に変わってきた。哲学や歴史と言った教養の重要性が

言われるようになってきた。残念なことに今、学生たちは歴史や哲学にほとんど関心を示さなくなっている。

目先の直ぐに形・利益になるものを求めてしまっている。

一方 Liberal Arts は Liberal の元の意味は気前が良い、つまり目先の利益に拘らないという意味。

だから、教養を身に付ければ目先の利益に捉われずに大局を見ることができるということになる。

教養を身に付けた上で技術を身に付ければ、様々なイノベーションを起こすことが可能になるのではという議論になっている。

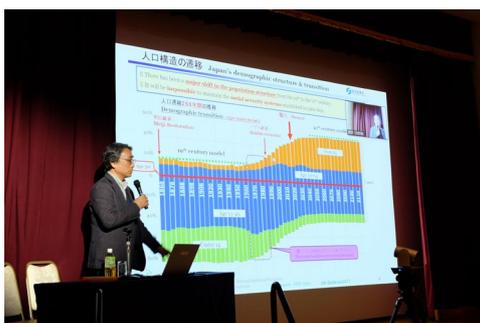
そういうことも踏まえて、子ども達に様々な体験をさせてくださいというのがコミュニティ・スクールの考え方になってきている。

文科省もそこにフォーカスし始めていて、今や全ての小学生にタブレットが貸与されることになっている。

経産省としては一人一人が深く学べるように、と構想している。

私たちはそこをさらに教え合う体系にしていくことを推奨している。そうしないと社会がバラバラになってしまう。

P29～36. 4. 社会の構造転換



* 何故、このようなことになっているかというと、人口の構造転換が進んでいるからだ。日本は高齢化社会に入っただけで半世紀を

過ぎているが、この間何の手も打っていない。

1970年、大阪万博の年、人口は1億人だった。そのうち6000万人が大阪万博に行ったのだが、そのころ既に日本は

高齢化社会に入っている。65歳以上が7%を超

[ここに入力]

えると高齢化社会というが、この 24 年後、高齢者が 14%を超えて

高齢社会（「化」が外れる）に入っている。その 12 年後、2006 年には 21%を超え超高齢社会になり、更にこの 1～2 年で

28%を超え、超々高齢社会になったと言われている。その中で実はどんどん寿命が延びている。

2007 年生まれの子供の予測平均寿命は 107 歳と出されている。この通りだとすると、今中学 2 年生の子供の半分は 2114 年

まで生きることになる。私たちは 22 世紀の話をしなくてはいけなくなっているかもしれない。

それだけでなく、2016 年のデータだが、日本人の平均寿命は男性が 81 歳、女性が 87 歳、平均で 84 歳になっており世界一になっている。

最頻死亡年齢は男性 87 歳、女性 93 歳、平均で 91 歳になっている。

一方で「寝たきり」になるまでの寿命を健康寿命というが日本では「寝たきり」の期間が平均で 10 年ほどある。

従って日本は平均寿命も健康寿命も世界で一番長いことになる。

少子化も同時進行しているため、人口構造はどんどん変化していき（P31）、2060 年ごろに高齢化率が 42%程度に達し、

高原状態になると言われている。また、人口の長期変動予測では、あと 30 年で人口が 1 億人を割り込み今世紀末には

5000 万人くらいになると予測されている。今の NHK 大河ドラマの時代、明治維新の頃は人口が約 3000 万人くらいだった。

その後、約 4 倍と急激な人口増加だった。1968 年に 1 億人を超えた時、『こんなに増えて大丈夫か』と言われていたが

今は『こんなに減って大丈夫か？』と言われる。さらに遡って室町時代の頃には 800 万人ちょっとしか居なかった。

明治維新以降、なぜこんなに急激に増えたかと言うと、大きな要因は工業化。

工業化により食糧事情、医療、科学技術そして社会環境の改善が、この人口増を可能にした。

もっと言えば、大量生産・大量消費の経済モデルなので、子どもが沢山生まれることは市場が大きくなることだった。

その後、頂点まで行き、今は減り始めている。

平均寿命はこのグラフのように伸びている（P33）。戦後の 70 年で約 35 歳、平均寿命は延びている。

その前の明治大正期は 40 歳前後だった。更に平安時代まで遡ると 20 代だったようだ。

平安時代のアイドル、陰陽師・安倍 晴明（あべのせいめい）は 80 歳過ぎまで生きたと聞いた。

人間は普通に生きれば 80～90 歳まで生きられる寿命を持っているが、何故平均寿命が短くなってしまったかと言うと、

病気・飢餓・戦争といったことで子どもが早く亡くなってしまったためだ。終戦直後、平均寿命が 50 歳だったのも

[ここに入力]

たくさん若い人達が亡くなってしまったからだ。その後、このように平均寿命が延びたのは良い社会を作ってきたからだ。

健康状態・医療・環境、そして戦乱が無い社会を作ってきたからに他ならない。

逆に産まれてから1歳になるまでの乳児1000人当たりの死亡率を見てみると、今は1.9人で世界で一番少ない国のひとつ。

約100年前のスペイン風邪が流行したころは10人中2人が亡くなっていた。今はその100分の1。

これは、私達が良い社会を作ってきた結果。言い方を変えれば、今や子供が産まれた時に嬉しいとは思っても

「この子が早く亡くなったらどうしよう」と考える人は居ないのではないだろうか？

子供が産まれればごく自然に大人になれる社会を作ってきたということだ。

これが実は、今の社会の少子化・高齢化の要因になっていると言われている。

35頁の表は経産省が作成したものだが、明治維新以降の150年間の人口構造の推移と予測だ。実数ではなく割合で示しており、中央の赤いラインが50歳。

下の緑色が0~14歳までの子供、青が15~64歳の生産年齢人口、オレンジが65歳以上の高齢者。

観てお分かりのように、凡そ時代が3分の1位ずつ分かれている。左右の3分の1はそれぞれ変動が少ないが

中央の3分の1は大きく変動している。私は1960年の生まれだが私自身がすでに少子化の世代。

私の両親は両親を含めて15人兄弟。しかし両親の子供は私を含めて2人、私自身も子供は二人しかいない。

母が健在中に何故もっと子供を産まなかったのか訊いたところ、『あんた生きてるじゃないか、大人になったじゃないか。

そういう時代になったんだ』と言われた。一方、母自身は9人兄弟姉妹だったが実際には、11人きょうだいで、そのうち2人の男子は

1歳にならずに亡くなったそう。

昔は跡取りが産まれないと困るから、男の子が3人位産まれる迄、不安なので産み続けるのだと言われた。

父は6人兄弟姉妹の5番目で長男。つまり上4人は女子で男の子が産まれる迄、産み続けたのだといえる。

そういう考え方だった。偶々、社会がどんどん経済発展し環境が変わる中で（子どもが）皆、生きられる社会を作ってきた。

私が産まれる頃には既に病院で産んでいたし、国もBirth Controlで核家族・一家4人が基本だといっていた。

そういう中で、子どもは死なないということが分かってきた。従って一男一女居れば幸せ、という考え方になってきた。

[ここに入力]

それが少子化の大きな要因。どの国でも経済発展が始まると急激に人口が増える。何故なら、従来の出産行動のままで、子どもの死亡率が下がるので急激に人口が増えることになる。その後一代を過ごすころ、子供が死なないことが分かってくるので子供をたくさん産まなくなってくる。そして大量に産まれた世代の高齢化が進み高齢社会になってくるのが普通の社会。

日本もそれを経て急速な人口減少・高齢化の時代に入った。

過去の時代の生き方を私の母方祖母の場合で見ると、祖母は15歳で結婚し33歳で11人目の子供を産んで産み終えている。

そうなるとこのグラフの50歳の赤いラインには意味がある。50歳の頃には末子が自立する時期になる。

50歳を超えた人はかなり少ない社会の時代だった。15,6歳になると家庭を持たされ、育児をし、子供を育て上げて、人生を終える、

そんな時代だった。事実、私が産まれた時には祖父はもういなかった。

これからは50歳以上の方が多き時代がやってくる。今は殆どの女性が働いていて家事は殆ど全自動家電だ。そして大体、

35歳前後で一人目か二人目を出産して産み終える。50歳の頃には子供が高校や大学に入り手を離れる。

その後も、大半の方々が人生がある社会となる。

言い方を変えると、お金や時間を自分の為や社会の為に使える人がこんなにたくさんいる社会がやってくるということ。

そうであれば、生きがいを持って生きられる社会を作っておくべきではないか、ということだ。

今までは『老後』『余生』という言葉で、【残りの期間】という感覚だったが、今は65歳で会社を退職しても

そこから30年人生がある時代だ。30年は短くないので、そこからも自分の人生を謳歌していく社会にしていかなければならない。

これまで高齢者の存在は問題であるとされ、対策を取ろうとしてきたがどれも上手く入っていない。

寧ろ高齢の方々もまだまだ活躍の場が沢山あり、社会からも必要とされ持続可能性の高い社会に切り替えられないか？

という議論になってきている。

P37~42. 5. 広がる格差

今、格差がこれからは広がるだろうと言われている。中教審の方針を作った時の議論のベースでもある。アメリカでは2030年になると、小学校に入学した子どもたちの大学卒業後に65%は今、存在しない職業に就くと言われている。

イギリスの研究では、アメリカの職業分類の内47%がAIに取って代われ、企業が人を雇わなくなると言われはじめている。

そこで問題になったのは、学校教育で子ども達に過去の知識を教えるだけで、子供たちは新しい社会に対応できるのか、ということだ。

[ここに入力]

言い方を変えれば、大人たちはもう子どもたちに『こう生きなさい』と言えなくなってしまったのではないか、ということだ。

では、子ども達にはどんな力を付けたら良いのかと言うと『探求心』であったり、お互いに新しい価値を作り出す力であったりだ。

そういう観点で新しい学習指導要領も作られるようになった。

更に「子供の貧困」の問題も議論されるようになった。相対的貧困率がひどいことになっていた。

各家庭の可処分所得を家庭の人数の平方根で割り、その中央値を取る。その中央値の半分以下で生活している家庭を

相対的貧困家庭という。今はこの 39 ページのグラフより下がって 14% くらいが相対的貧困率である。

下がったのは平均所得が下がったからでしかない。今は可処分所得 122 万円以下が相対的貧困家庭になる。0~17 歳までの子どもの 7 人に 1 人が

相対的貧困家庭にいることになる。そのうち一人親家庭では約 6 割になり、OECD 諸国の中では最悪である。

そんな中で、学校給食で栄養を取っている子供たちが相当数いると思われる。

そして学校を通して貧困が世代間で再生産されてしまう。つまり、親が貧困だと子供が高い教育を受けられない為に貧困になり、

更に孫が貧困になってしまう。この悪循環を止めるためにはどこに楔を打ったら良いのか、お金を回せばいいのか？

これまでの政府の施策はどれも有効性がなく、民間のシンクタンクが如何に子ども手当が重要かという報告書も出したが

殆ど反映されなかった。今はお金だけ回しても駄目だということも言われ始めていている。

P43~52. 6. 帰属・競争から自立(自律)・協働へ

* 今ではお金だけ回しても駄目だと言われ始めていて、何が重要かと言うと

『やる気が起こらなくなっている状況をどうすれば良いか』ということだ。貧困になることによってやる気が起こらなくなっている。いまでは自立(自律)が求められる社会になってきたわけだが、自分達の子どもの時代はモノを持つことが幸せだった。

親たちは戦後の経済成長に乗かって生活をしてきた世代だ。

この時期は人々は「人口」として、購買力・労働力として位置付けられてきた。

その頃の学力は「ふるさとを捨てる学力」であり、良くできる子ほど故郷から出て帰ってこない。

人の入れ替え可能な人生でもある。例えば今の東大でも未だやっているが、

入学して個人的関係ができれば一人一人違う大切な学生だが、

入ってくるまでは偏差値で競争して 1000 人中上位 4 人くらいが入ってくれば、誰でも良い入れ替え可能な社会だ。

これからは、存在欲求、お金よりも認められたいという欲求が強い若い人達には

「ふるさとを作り支え合える学力」が必要になってきたと言える。

[ここに入力]

今、社会的に求められているのはローカリティとアイデンティティである。自分なりに組み換えの利くアイデンティティが求められる。

そういう意味では自分が育ってきた地域のことをしっかりと身に付けていながら、自分の根拠をしっかりと持って

その都度その都度、柔軟に対応し良い関係を作ることができる人が欲しいと言われている。

その意味で、これからの子どもたちにとって大事なものは、地域での様々な活動だと言われる。

更には、医療も介護も自分で取り組む時代と感染症が一緒にきてしまった。

昔、日本人の死因は結核のような感染症が中心だったが、それを必死に抑えてきて今や生活習慣病が主因になってきた。

従って医療も総合医に切り替えて病床数も減らしてきた。そこに今回、また感染症の時代がやってきてしまった。

これからの医療は、直す医療から予防・進行管理し寄り添う医療に変わっていかねばならない。

そして感染症の時代は終わっておらず、グローバル化の社会では外からどんどん入ってきてしまうことが分かった。

そうすると「予防」していかななくてはならず、一人一人が自律的に対応しなくてはならない。

社会全体が信頼感を高めながら一人一人が自律的に予防に取り組む、それが社会全体にとって良いことだという関係をつくらないといけない。

P53～60. 7. 不穏な未来予測

* 現在、認知症の高齢者は 500 万に程いると言われているが 2025 年には 730 万人になり、更に 2060 年には 1154 万人（総人口の 13%）になると予測されている。

既に首都圏は高齢者の施設が足りなくなって、近県に持ってもらっているが、全国的にそういう状況になると言われ始めている。

そうすると、もう病院や施設で、という話ができなくなるので、地域で共生できるような社会を作りませんか、というのが厚労省の方針になってきている。

更に科学技術の面でも、ムーンショット型の研究開発制度が首相官邸サイドで作られていて、今、その検証作業が始まっている。

これは後 30 年くらいで完成する巨大な技術だ。25 項目の検証作業が始まっているが、その中の 8 項目について

(P57) 自分たちのところに来ている。高齢化問題を科学技術と人材開発で乗り切る、という発想・取り組みである。

基本は人工知能と生体認証技術を結び合わせて個別のサービスを提供しながら新しい経済開発を行なおうというもの。

結果として、パーソナライズされたサービスの自動化・無人化を実現する物だ。

8 項目のうち 7 番（農林水産業の完全自動化）と 8 番（建設工事の完全無人化）については無人化可能とほぼ検証された。

[ここに入力]

また、6 番（どこでも医療アクセス実現）の例を挙げると、スマホにアプリを入れて自分の腹部の写真を 30 秒撮ると

体温・血圧・脈拍、自律神経（交感神経・副交感神経）の状態を測定でき、毎日継続することで健康管理ができてしまう。

このデータとマイナンバーと既往症が結び付けられれば、毎朝測定していけば医師（人間ではなくシステム）の健康診断を

受けることができるようになる。これが進めば、毎朝 PC などを覗けば、医師のアバターが出てきて健康チェックをしてくれ、

その診断に基づく薬が処方され製薬会社にそのデータが飛び、ドローンでデリバリーされてくる、という世界が実現される。

これは山間僻地離島に居ても可能になる。逆に言うと薬剤師は要らなくなるかも知れない。

全部システムがやってくれるので、私が自分であることを強く思わなくてもシステムがお前だ、と言ってくれる時代がやってくるかもしれない。

それで楽しいですか？如何でしょう？

これがさらに進化すると何がおこるかと言うと、今は結婚難です。マッチングアプリがあり結婚相談所などでも使っているが

国が管理しだして『あなたはこの人と結構んしなさい。あなたはこういう人生です。』などと言いつつではないかと言われている。

『わたし』というものを全部システムに明け渡すようになってしまい、怖いことになりかねない。

怖いと思うのは文系で、理系の人間はこれは素晴らしいと思うんだ、などという話もあるが。

いずれにしてもシステムが『お前だ』と言う時代がやってくるかもしれない。

もう一つは、コロナ禍で日常生活の中に働くことや学ぶことをどう組み入れていくかが問われている。

P61～68. 8. 子どもに必要な相互認証と対話的学び

褒める以前の『良い関係』を作ることで、「僕は大丈夫だ」と思えたり「一生懸命やろう」と思ったりする。

日常生活のリズムを刻むことが大事。

虫歯の研究でも、虫歯を予防することが身体や精神的な健康全てに関わっているという議論が出始めている。

歯磨きを習慣化するということは実はすごく労力が要る。日常生活の生活習慣をきちんと身に付けていく中で

歯磨きが位置付けられていき、歯磨きをすると気持ちが良いというところまで凄く労力がかかるが、

そういう気持ちが持てるかどうかで虫歯に関わっているという研究が出てきている。

実は、虫歯の多い子供は体の調子が良くないし、生活習慣が乱れているし、やる気が起こらない状態にいる。

そして精神的にも不安定な子供が多いという結果が出た、という報告が歯科医師からあがってきている。

更に、肯定感を高めるために褒めましょう、と言ってきたがそれが全部、評価の問題にすり替わってしまう

[ここに入力]

という問題がある。

そこで大事になってくるのが『ことば』の問題だ。話せばわかってくれるという関係がちゃんとできているか、だ。

子どもの頃から言葉がけがあり、ちゃんと話せばわかる関係の中で褒められてきたかどうか。

その関係なしで褒められ続けてきていると、それは評価に代わってしまう。

学力を高めるためには自己肯定感が必要なのに、自己肯定感を高めるためには学力が必要と言うことで、ぐるぐる回ってしまう。

幼いころから命令や叱責ではない、対話を積み重ねてきた子供の方が、自己肯定感が高いし学力も高いということが分かってきた。

きちんとした対話を積み重ねてきた子供の方が、経済力や人種に関係なく学力が高まっていく傾向にあることが、アメリカの研究では分かってきている。

つまり、家庭が大事だということになるのだが、今や家庭も様々な形態になってきている。

貧困であれば、そういうことは難しくなってしまうので、地域で第三者が何かできないか、という議論になる。関係が貧困だとお金の面でも貧困になってしまうということになってしまう。ことばがちゃんと使えないと自立・自律も不可能になってしまう。そういう悪循環が回ってしまっているのではないかということが指摘され始めている。

P69～73. 9. どの世代にとっても必要な証人と肯定

実はこのことは子どもだけでなく高齢の方にとっても大事であることが、静岡県との共同研究で分かっている。

健康度を上げる、死亡率を下げる要因は運動・栄養・社会参加と言われていて

これら3つをしていない人と比べると、運動・栄養をきちんとしている人の死亡率は3割下がる、更に社会参加すると5割下がる。

だから政策にもこの3つを考慮した方が良いと言われた。

更にこの後の追跡研究で、運動も一人でジョギングする人よりも、2～3人で談笑しながらウォーキングする人の方が長生きだと分かった。

食事でも一人で栄養を色々気にしながら食べている人より、2～3人で談笑しながら食べる人の方が健康度が高いことが分かってきた。

社会参加も町内会で皆で談笑しながら草むしりする方が、健康度が高いことが分かってきた。

厚労省が運動・栄養・社会参加が大事だと言ってきたが、一番大事なのは『人間関係』だということだ。

高齢者の誤嚥についても『美味しいね』と会話しながら食べている人は誤嚥が少ないと分かってきた。

一人で食べている人は、食事が美味しいと感じにくいし、誤嚥が多い。

寝たきりでも横で孫が『美味しいね』と言いながら食べると、一生懸命食べるので誤嚥が少ない。

大事なのは「食品を摂る」ことではなく（一緒に）「食事」という人間関係ではないかと医師は言っている。

[ここに入力]

医療としても、そこを考えないといけないのではと言い始めている。

72ページのグラフはアメリカの高齢者の死亡に関わる研究を Review し直した結果だが、飲酒・喫煙・BMI といったことと独立して

「良好な人間関係の中で生活していた人の方が長生きである」とどの論文も言っていたことが分かった。つまり、人間は社会的生き物であるということだ。

私達是对話的にしか生きられないのではないかということだ。

対話的關係の中で信頼感が生まれてくると、『よし、やろう』という気持ちになって、環境を変えようとしていく。

P74~110. 10. <ちいさな社会>をたくさん作る

これまでの話の中で今、私たちが取り組んでいるのは、地域にある空き家を活用して、小さなネットワークをたくさん作り、

孤立しがちな方が来れば、誰かが必ず居て会話ができる、ということをやっている。

こうなると、趣味を活かして子供に教えたい、というような方がたくさん居られて、持ち込みで色々なものが始まる。

更に夜、共働き家庭で子どもが一人で家にいると危ないので、ウチの学生が発案して居場所づくりをした。

学生たちが子ども達と一緒に居場所を作り始めている。そこでは高齢の方も手伝ってくださり、見守り隊のようなことを始めたり

している。シングルマザーにも居場所ができる。一軒の空き家があると、こうやって新しい関係づくりが始められる。

こういう場所に皆さんのような方がいらっしやるだけで随分、安心度なども変わってくる。

学生にとっても自分で発案してやりだすことで、肯定感が高まることに繋がる。自分の得意なことを活かして新聞を発行したり、

WEB で HP 制作してくれたりする。更にはメディアの取材が来たり、海外からも訪問客が来たりして注目されている。

一軒の空き家を拠点に、住民が自分達で地域のコミュニティを作り出し、文化を生成し、多世代の交流を実現し、居場所を作っている。

大事な的是お互いに認め合っていることだ。評価せずお互いに「ありがとう」と言い合う中で信頼感を醸成している。

P111~120. 11. ポストコロナ時代に向けて

コロナがで驚いたことが幾つかある。大学によって格差が出てしまったことは明らか。

東大では、全学生が 24 時間繋ぎっぱなしでも大丈夫な環境が整備され、孤立しないようになっている。

面白い学生が居て、入学時に研究室を指定できる制度を利用している学生だが、オンラインをいいことに 4 月からすぐに

[ここに入力]

フィールドに入り込んでしまっている。岩手県の大槌町（3.11 被災地）に入り込み、授業は全てオンラインで受けている。

そこで街づくりに関わり、将来は企業を立ち上げたいと言っている。緊急事態宣言が解除されても戻らず、特例でこの学生の受講する授業は、全てハイブリッドでやることにした。こういうことが可能な社会になってきた。

もう一つ発見があったのは、ゼミにも出てこられない引きこもり気味の学生に関してだ。

オンライン授業だと、そういう学生も出席してきて顔出しして発言までする。二次元平面なので大丈夫らしい。

そういう学生から対面の暴力性ということを指摘され、気づかされた。社会性が持てる持てないとは違うレベルの話だ。

「相手の目を観て」ということが怖いと感じる人も居るが、そういう彼らもオンラインの二次元平面なら大丈夫だということだ。

今まではそういう学生を、ゼミに引き出そうとしてきたが、オンラインであれば彼等の部屋にあるパソコンを通じて、彼らのところに入り込めることに気づいた。そういうスタイルで新しい関係を作るということも考えなくてはいけなかった。

ある私学が完全オンラインの学部を作ったのだが、そのスローガンは『大学を持ち歩こう』だ。

スキマ時間で受講できるように、授業は 10 分単位の細切れで。それを 10 コマ受けたら 1 限分というように文科省も認可している。

また、逆の発想の実践もある。簡単に言えば交換日記だ。藤沢市がコロナ禍での高齢者の孤立対策として始めたもの。

3 人一組（高齢者 2 人と進行管理する若者）で市役所を介して交換日記をする。

最初は遠慮がちだったものの、暫くすると想定外のことが起こり始めた。

オンラインではなく市役所を介するので手紙のように時間が掛かるのだが、その間に相手のことを妄想するようで、2 人の高齢者が

学生のことを気に掛けるようになる。食事のこととか、学校のこととか、人間関係とか、人生相談のようになる。

気が付けば、一番救われたのは学生だったりしている。お互いに相手を慮ることが起こり始める。

そういう中で良い関係を作り始める

P121~134. 12. <ちいさな社会> づくりの意味

<ちいさな社会> づくりの要は、お互いに認め合う関係を作ることだ。

そうすると今の関係をよりよくしようという気持ちが起こり、信頼感が生まれ、自分がそこに居て良いんだという関係ができてくる。

その基本になるのは「ことば」だ。

それは教育の切り口でもあるし、皆さん（DF）のような民間の団体の方々が伴走することだ。

行政は対応や措置はできても伴走はできないから。

[ここに入力]

寄り添いながら、肯定感を醸成し、お互いが変わっていく、喜びあうような関係を作っていく、ということをやっていく必要がある。

そういう意味では、「あいまいで緩やかな関心」を持つ人々が多重に覆いかぶさるような社会を作っていくことが必要。

125 ページは明治大学の小田切氏の作られたイメージ図に手を加えたものだが、分岐点で誰かが関わりだすと、

暫くするとやる気が起きてくる事例が多い。

この分岐点から逆臨界点迄の AAR (Anticipation/Action/Reflection) 循環という。

Anticipation : 予期することはウキウキすること

Action : やってみる

Reflection : 振り返る・・・評価はしない

大体、3 年間くらいかかるが、そうやって寄り添っていると「やろう」という気持ちになってくる。

試行錯誤の開放系の循環である。(129 ページ) これができると楽しい筈である。

『でもね』で否定せず『だったら、こうしよう』という関係が大事である。

この全体が『学び』というものである。

センス・オブ・ワンダーが駆動する AAR 循環に寄り添っていくことが、子ども達のセンス・オブ・ワンダーを守ることになる。

地域社会の中にコミュニティを作り AAR 循環を起こす場・運動を作り出すことが重要なのです。

P135～144 (最後) . 13. FOR ALL の上に BY ALL へ

さらに FOR ALL な関係から BY ALL な関係に変えていきたい。

136 ページの写真は 2 年前、コロナでマスクが足りない時に、私達と一緒に活動していた子供たちが、自発的にマスクを手作りして

地元の高齢者に届けた活動のものだ。

そうしたら、高齢者たちが子ども達の為にマスクを作って、地域の学校に一人当たり 3 枚のマスクを配ってくれた。

そういったことをとっさに思いつける力を本来、持っている筈だ。良きことを感じて実現しようとする力になっていく。

そういう意味では、「配慮していく」ということであり、「共通善」を実践する力を子どもも持っている。

そして大人もそれに応える力がある。それによってそういう力が「公共財」として皆のものになっていく。

それが社会をより良いものにしていくと思う。

行政が皆の為にサービスを提供するのがベースかも知れないが、私達自身が皆で AAR 循環を回す関係を作っていく、

お互いに良い関係になっていくことが期待される。私たち全員が当事者になっていくことだ。お互いに尊重し合いながら

「学び続ける」、これは知識を付けるだけでなく、こういう関係の中に入って良いことを実現しようという動き

[ここに入力]

に繋げることだ。

そんな時に、皆さんのような方々が地域社会の中に入って「一肌脱ごう」というようになっていただけたら、有り難いと思う。

これまでの経験を子どもたちに伝えていただいて、子どもたちが「あんな大人になりたいな」と思ってもらえると有り難いと思う。

質疑応答（藤村副所長）

(1) 事前に受けていたものから選択し回答

Q1：家庭での親の役割の方が大事だと思うが如何でしょうか？

A1：仰ることは尤もだが、この取り組みでは「地域」と「学校」で「家庭」は外した。

家庭が多様化し過ぎていて捉えられない。また、貧困という問題もあり、家庭にこれ以上負荷を掛けると

壊れてしまうのではないかという危惧がある。無理を強ければ虐待や育児放棄にも繋がりがかねない。

そういう家庭の親も安心できるような社会に変えていかなければならないということである。

Q2：政府の関係者が先生の話をお聴きください。国がおかしくなるとコミュニティレベルに降りてくる。

ボトムアップのコミュニケーションの必要性・バランスに関してどうお考えでしょうか？

A2：人工知能の発達によって中国型の全体主義が可能になったと言われている。

一方で台湾型の全構成員参加型の民主主義も可能だと言われている。

日本はどちらを選択するのでしょうか？当然後者だと思います。

そういう意味で皆さん全員参加型のボトムアップで社会を変えていかないと多分、何も起こりません。

皆が参画して価値をぶつけ合いながら進めていかなければいけないと思う。

以上